

【正門】—①



明治41年(1908)の目白校地移転とともに建設されて以来、正門として使用されている。学習院の名称は、嘉永2年(1849)孝明天皇から「学習院」の勅額が下賜されたことに遡る。キャンパス内の多くの建物が消滅、あるいは移築によって姿を変えている中で、正門は当時のままの形状を残している。写真は、馬車で登学する秩父宮雅仁親王。平成21年(2009)、国登録有形文化財に登録。

【北別館(旧図書館)】—②



明治42年(1909)に図書館として建てられた。設計は、東京音楽学校奏楽堂(現東京芸術大学旧奏楽堂)や帝国図書館(現国際子ども図書館)と同じく、久留正道による。元々は煉瓦造の書庫を持つ比翼型の建物であったが、文学部棟(北2号館)建設により、昭和54年(1979)片翼が切り離されてL字型となり、今の場所に移設された。現在は学習院大学史料館(博物館相当施設)として使用されている。平成21年(2009)、国登録有形文化財に登録。

【建物の特徴】
木造平屋建、棧瓦葺、切妻造。久留正道設計、明治42年(1909)竣工。中央部分には、採光のため天窓が設けられ、周囲の窓の一部には、明治期の「ゆがみガラス」が今も残っている。床下通風口には、学習院の校章である桜のモチーフをかたどった金属格子がはめ込まれ、そのほか廊下の持送りや扉の蝶番などの各所にも、桜の意匠を見ることができる。壁は、木製の建具、板天井、ペンギン印の窓鍵などが、竣工当時の面影を今も伝えている。

【東別館(旧皇族寮)】—③



当時全寮制だった学習院の皇族寮として、大正

2年(1913)に建てられ、山階宮武彦王や秩父宮雅仁親王をはじめとする皇族たちに使用された。正面玄関には、馬車をよせる車寄せがあり、玄関底に付けられた桜模様の飾りは、向かい合わせに建てられていた院長官舎(現在は愛知県犬山市の博物館明治村に移築)のものと同対を成していた。写真は、馬車で登学する秩父宮雅仁親王。平成21年(2009)、国登録有形文化財に登録。



【建物の特徴】
木造2階建、棧瓦葺、切妻及び寄棟造。宮内省内匠寮設計、大正2年(1913)竣工。玄関の庇が高く設けられているのは、馬車で登校した皇族に配慮してのもの。庇の正面や柱には、学習院の校章、桜の花がデザインされている。教室として改造されるにあたって、内装に手が加えられたが、間取りに大きな変化はなく、階段、廊下、手洗所などは建築当時の面影をそのまま残している。明治から大正期に建築された学校寄宿舎はあまり現存しておらず、貴重な建物である。

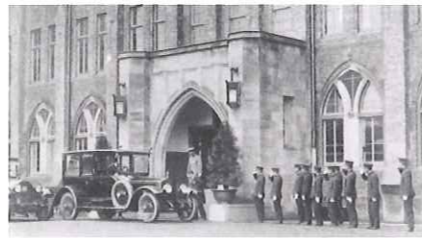
【西1号館(旧中等科教場)】—④



昭和5年(1930)に中等科教場として竣工した。大学開設後は文政学部の本館となり、2階と3階の北側に研究室が置かれた。東側の正面玄関を中心として、左右シンメトリーに建てられ、東、南、北側の3方には教室、西側には2箇所の階段室と付属棟の手洗所がある。現在は、教室棟として使用されているが、玄関ホールの木製掲示板、壁羽目板張の腰壁、階段など、外観を含めて、当時の雰囲気伝えるものも多い。平成21年(2009)、国登録有形文化財に登録。

【建物の特徴】
鉄筋コンクリート造、地下2階(竣工時は地下1階)地上3階建。宮内省内匠寮設計、昭和5年(1930)竣工。基本設計を担当したのは、朝香宮邸(現東京都庭園美術館)等を設計した内匠寮技師権藤要吉。ネオ・ゴシック様式の外観に加え、2・3階の正方形の窓や、階段の丸窓など、アール・デコの要素も見ることができる。英語会話教室(現214室)には、ステンドグラス入りの窓や大理石を暖炉風に模したストーブ置場が設けられた。現在、窓は改修されたが、ストーブ置場は今も残っている。

【南1号館(旧理科特別教場)】—⑤



昭和2年(1927)に中等科・高等科の理科特別教場として竣工した。当初より理科教室として設計されていたため、昭和24年(1949)大学理学部の開設とともに理学部研究棟となった。正面玄関・1階窓の尖頭アーチ、2・3階の縦長の窓、外壁の付け柱を備えたネオ・ゴシック様式の建物で、階段手すりや窓枠など各所に、意匠が凝らされている。写真は、昭和2年度の卒業式に幸じた天皇陛下。平成21年(2009)、国登録有形文化財に登録。

【建物の特徴】
鉄筋コンクリート造、地下1階地上3階建。宮内省内匠寮設計、昭和2年(1927)竣工。外観はネオ・ゴシック様式で、玄関ポーチのある中央棟を以て、左右H型に棟がある。外壁はスクラッチタイル張で、外壁の付け柱は、ゴシック様式の特徴であるバットレス(控壁:外壁に直角に取り付けられた補強のための支柱)の意匠。中央の階段には3階まで続く細長い3連のアーチ窓が並び、手すりや窓枠などにはアール・デコ調のデザインが施されている。

【乃木館(旧総寮部)】—⑥



明治41年(1908)の目白校地移転を機に、6棟の寄宿舎・食堂・衛生病棟とともに、総寮部として建てられた。全寮制を導入した第10代乃木希典院長は、院長官舎ではなく、この総寮部内の一室に起居して、学生と寝食をともにした。昭和19年(1944)、総寮部取り壊しの際、乃木院長の居室であった部分が「乃木館」として保存され、この場所に移築された。現在は、学生の部活動に使用されている。平成21年(2009)、国登録有形文化財に登録。

【建物の特徴】
木造平屋建、棧瓦葺、寄棟造。久留正道設計、明治41年(1908)年竣工。竣工当初の総寮部はL字型の建物で、乃木院長室、会議室、事務室、購買部、倉庫などで構成されていた。板張の床、長押

と柱が配された壁、棹縁天井をしつらえた和風の内装で、現在は床のみが畳敷きになっている。北東部の玄関、手洗所、流しは、昭和53年(1978)に増築された。現在はこの玄関が出入口として使用されている。

【厩舎】—⑦



明治41年(1908)の開校当初は、目白通りをはさんだ正門の向かい側(現目白小学校校地)にあった。目白通り拡張に伴い、昭和2年(1927)、倉庫(馬具置場)とともに現在の場所へ移された。通路をはさんで左右両側に馬房を設けている大型の厩舎は珍しく、かつては20頭の馬房に分けられていた。厩舎の西側には、渡廊下で結ばれた鞍庫(旧馬具置場)があり、厩舎と一緒に移築された。平成21年(2009)、国登録有形文化財に登録。

【建物の特徴】
木造平屋建、スレート葺、寄棟造。久留正道設計、明治41年(1908)竣工。出入口が四方に設けられ、屋根の中央には、空気抜が設けられている。中央の通路をはさんで、左右に馬房が並び構成は、軍隊の形式を継承したともいわれる。旧制学習院では、武課の授業の一環として馬術が行なわれており、学生数に応じた馬が必要であった。そのため、竣工時は片側10箇所、両側で20箇所の馬房があり、20頭の馬を飼育していた。現在は14の馬房に変更されている。

●そのほかにも、キャンパス内には歴史的建造物や史跡があります。なお、見学の際には最終頁の注意事項をお読み下さい。

【図書館】—⑧



北1号館、南2号館、本部棟(1991年取り壊し)、中央教室(2008年取り壊し)とともに、東京文化会館などの設計で知られる前川國男設計事務所が設計を担当し、昭和38年(1963)に竣工した。日本を代表する近代建築家前川國男の作品を伝える建物として、貴重な存在である。一辺14.4mの3つの正方形(閲覧室棟・事務室棟・書庫棟)が、ロビーを中心に配置される構造は、旧図書館(北別館)の比翼型を継承したものとされる。

【中央教室頂部】—⑨

中央教室は、建築家前川國男設計事務所によって、昭和35年(1960)竣工した。大学のシンボルの

存在として50年近く愛されたが、中央教育研究棟建設のため、平成20年(2008)惜しまれつつ取り壊された。頂上までの高さは25m、700名を収容できる大型階段教室で、その形状から「ピラミッド校舎」と称された。教壇を西南方向に設けた構造上、音響効果を最大限に活かすことができるよう、北東側に偏心していたことが、この頂部からもわかる。

【出陣の碑】—⑩

昭和19年度(1944)の高等科文科2年生一同によって建立された。戦争のため卒業が1年早まった彼らは、「御国守り 南のきはに 身はすて 目白ヶ丘の櫻と咲かむ」「春されば めぐし乙女ら かざすてふ 目白ヶ丘の櫻と咲かむ」など、各々が「目白ヶ丘の櫻と咲かむ」を下の句とした和歌を詠み、生徒出陣に際して心をひとつにした。戦争にまつわる記念碑は数多いが、このように短歌の下句だけが刻まれた歌碑は全国でも珍しい。揮毫は第17代院長山梨勝之進。

【神壇・神壇碑・国境採石塊碑】—⑪

神壇は、明治42年(1909)明治天皇の学習院行幸を記念し、翌年乃木希典院長の私費によって築造された。壇の中央には天覧神が植えられ、周囲は当時の国境から集められた80個の石で前方後円型に築かれている。石には一から八十までの番号が刻まれ、国境採石塊碑にある石の採取地と対照できる。神壇は大正9年(1920)東京都指定文化財に指定。神壇碑と国境採石塊碑は、大正5年(1916)に第11代院長大迫尚敏によって建立された。

【青木義比歌碑】—⑫

夏月涼 かくはかり すゝしきよはの
月かけを しはしきゝへよ にはのまつかえ
(鶴山)
山家夏 世のうさの みちもはなれて
やまさとの なつゆふへは すゝしかりけり
(義比)

江戸末期の旗本青木寅之助義比と、その父鶴山の歌を、一首ずつ刻みである。義比が文久2年(1862)に没した翌年に、家臣らによって、義比が好んで選んだこの地に建立された。背面には、歌碑建立の経緯を記した今治藩医半井梧庵の文が刻まれている。

【芭蕉句碑・富士見茶屋跡】—⑬

目にかゝる 時や殊更 五月富士
江戸時代、眺望に勝れたこの地は富士見台と呼ばれていた。ここには、富士見茶屋(別名珍々亭)があって、多くの風流人が訪れた。初代歌川広重の連作「富士三十六景」の一つ「雑司ヶ谷二見茶屋」は、ここからの風景を描いたものといわれている。句碑に刻まれているのは松尾芭蕉の句で、文化7年(1810)、雑司ヶ谷の俳人金子直徳によって、富士見茶屋の傍らに建てられた。

【鳩魂碑】—⑭

昭和13年(1938)、学習院輔仁会伝書鳩部の卒業生有志によって建立された、亡くなった約300羽の鳩の魂を鎮めるための碑である。伝書鳩部は、昭和6年(1931)に陸軍からフランス製

大型移動鳩舎と鳩20羽余が贈られたことを機に、伝書鳩研究会として発足し、同11年輔仁会へ加入。同18年軍用鳩部と改称した。同20年、中等科教場(現西1号館)屋上にあった鳩舎が空襲で焼失したこともあり、終戦とともに廃部となった。写真は当時の学生が描いた鳩舎の版画。

【血洗いの池】—⑮

赤穂浪士の一人堀部安兵衛が、高田馬場の決闘で叔父の仇を討った際、この池で刀を洗ったことから名付けられた。いつの頃からか、先輩から後輩へ伝えられているこのエピソードは、大正時代の高等科生たちによって作られたもの。元々は湧水でできた池で、かつては灌漑に用いられ、水門があった。目白校地の中でも特に緑豊かな場所で、水鳥をはじめとして、多くの動物の姿を見ることができ、今も昔も学生たちにとっての憩いの場所となっている。

【道しるべ】—⑯

東面には「是ヨリ左ぞうしがや」、南面には「右ほり之内」と刻まれている。この場所は、鬼子母神大門に通じる道と堀の内に通じる道の分岐点であった。「ぞうしがや」は雑司ヶ谷村鬼子母神(豊島区雑司ヶ谷)を、「ほり之内」は堀之内村妙法寺(杉並区堀の内)を指していると思われるが、現況とそぐわない点もあり、位置と向きについては、諸説がある。学内には、他にも2基の道しるべ、青木義比歌碑、芭蕉句碑など、貴重な遺跡が数多く残っている。

【乃木号の碑】—⑰

乃木号は、日露戦争時の旅順開城の時に、ロシア要塞司令官ステッセル將軍から乃木大将に贈られた壽号(ステッセルのスにちなんだ命名)の仔として、明治44年(1911)に生まれる。壽号に似ていた芦毛の仔馬が、乃木号と名づけられて、乃木院長へ贈られた。院長の死後も学習院の厩舎で飼育、馬術練習に用いられ、昭和12年(1937)に27歳で死亡した。同年、学習院の卒業生団体である校友会の有志によって建立された。

【中央教室前噴水御影石】—⑱

中央教室(通称ピラミッド校舎)の北東側に設けられている噴水の水盤。半月盤の御影石が2枚組み合わせられている。中央教室・北1号館・南2号館・本部棟(1991年取り壊し)の設計を担当した前川國男設計事務所は、個々の建物だけではなく、複数の建物と広場から構成される校舎群全体をデザインし、噴水もその中の一つとしてつくられた。平成20年(2008)中央教室が取り壊される際に、この場所へ移設された。

(生田享子)